
白月の祈り姫

莉月 桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白月の祈り姫

【Nコード】

N9287Q

【作者名】

莉月 桜

【あらすじ】

王宮騎士団『蒼月』^{アオツキ}の少女騎士シエリーティアは、ロセリア王国最高位巫女である『白月姫』^{はくつきぎ}の専属護り手。

一ヶ月半後に迫った『白月姫』の正式な継承式を前に、他の国から巫女の力を狙う事件が次から次へと相次ぐ。『白月姫』を護らなければいけない立場なのだが、巫女の親友でもあるシエリーティアまでが執拗に敵に狙われてしまつて……！？

剣と魔法の世界で織り成す、オリジナル恋愛ファンタジー。

登場人物紹介

白月の祈り姫

〓〓登場人物紹介〓〓

シェリーティア・ブラウ

アオツキ

ロセリア王宮騎士団『蒼月』に属する。

最高位巫女である『白月姫』はくつきの専属護り手。

剣と魔法を両方使う、『蒼月』の中では数少ない少女騎士。

素直で一途な少女。 紅い髪に薄茶色の瞳。 16歳。

ナギ・アイレス

ロセリア国王直属の剣士団『黒月』コクゲツに属する剣士。

口は悪いが、剣の腕は『黒剣』との異名を持つほど。

シェリーティア、レイスとは幼なじみ。

シェリーティアには言えない隠しごとが幾つかある。

黒髪黒眼。 16歳。

レイス・エルダート

ロセリア王宮騎士団『蒼月』に属する。

シェリーティアと共に最高位巫女である『白月姫』の専属護り手。

誰に対しても面倒見のいい性格。

彼の優しい笑顔と声は王宮内でも評判で、『癒しの騎士』とも呼ばれている。

シェリーティア、ナギとは幼なじみ。

茶褐色の髪に同色の瞳。 18歳。

ラファイ

『白月姫』付きの侍女。

シェリーティアとも仲が良いが、実はロセリア国王直属の剣士団『黒月』に属する少女剣士という顔をあわせ持つ。『黒月』に所属する中で、12歳である彼女は最年少。声が出ず、口をきけない。ただし、読唇術と魔法によって意思疎通は出来る。薄紫色の髪に董色の瞳。

アイジユ

ロセリア王国最高位巫女『はくつき白月姫』。

現在、シェリーティア、レイスの二人が専属護り手として守護している。

金髪翠眼。本名・年齢などは隠されていて不明。

キーベル・チエスター

ロセリア王宮魔法士団『スイゲツ翠月』に属する。

右眼にのみ小さな丸い片眼鏡をかけているのが特徴。物腰がやわらかく、レイスとあわせて癒しの双壁と呼ばれている。銀髪・薄青の瞳。23歳。

オルハ

ロセリア国王直属の剣士団『コクゲツ黒月』に属する魔法剣士。ナギの同僚。

ハインス・エルダート

ロセリア王宮騎士団『アオツキ蒼月』の騎士団総長。レイスの父親。

二親を早くに亡くしたシェリーティア、ナギの親代わりでもある。騎士団総長になる以前、先代の『白月姫』の専属護り手を務めていた。

ザキ・リッセン

ロセリア国王直属の剣士団『コクゲツ黒月』の剣士団長。

剣士団長になる以前、ハインスと共に先代の『白月姫』の専属護り手を務めていた。

その縁あって、ハインスとは旧知の仲。

ブリシラ・リッセン

ロセリア国王直属の剣士団『黒月^{コクゲツ}』の剣士団副長。

主に王妃の身辺警護を担っている。

ザキの妻でもある。

グラン

専属契約していない少年魔術士。

白銀に近い真っ白な髪と薄緑の瞳である外見から天使のようだが、無邪気で冷酷。

初対面時から、シェリーティアに興味を持っている。推定15〜16歳。

カルヴアス

北大陸にあるイストラダ王国の王宮専属魔術士。

外見は三十代半ばに見えるが、禁術にて自らの寿命を延ばしている。実年齢は不明。

ロセリア王国：西大陸に位置する国。王宮都市はミナス。

イストラダ王国：北大陸一の大国。

1：始まりの足音（前書き）

少しでも楽しんでいただけたら嬉しいです。
どうぞよろしくお願い致します。

文章の追加をしました。

1：始まりの足音

ぶつかり合う高い金属音が、空に響いては吸い込まれていく。
六の月もまだ始まったばかり。初夏にも満たない今の時期は、朝の空気が涼しく気持ちがいい。

週に二度ほどある剣術の朝練習も、いつにもまして気が入るというものだ。

そんなことを思い朝練習の剣の手合わせに臨んでいるのは、シェリーティアという名の少女騎士である。

シェリーティアが所属しているのは、西大陸に位置するロセリア王国の王宮騎士団『蒼月^{アオツキ}』である。

『蒼月』には、現在、総勢五十五名の騎士が所属しており、それぞれの能力を鑑みて担当部署ごとに班が編成されている。

『蒼月』の中でも数少ない少女騎士の一人であるシェリーティアは、剣の腕と魔法力の両方をバランスよく兼ね備えていた。

そのこともあって、ロセリア王国最高位巫女である『白月姫^{はくつき}』の専属護り手という特別な任を担っている。

——少しのあいだ、シェリーティアと相手の少女騎士が打ち合う音だけが辺りに響く。

高い位置で一つに結われた長い髪はシェリーティアが動いたたびに左右に揺れ、目に鮮やかな

紅い髪は朝陽を浴びて金色にもみえた。

「取った！」

「しまった……っ！」

一瞬の間をつかれたシェリーティアの手から、ひときわ高く短い音とともに剣がはじかれる。

「——そこまで！」

鋭い声が飛び、手合わせをしていた二人の動きが止まった。

「踏み込みが甘かったな、シェリーティア。少し躊躇ったようにも見えたが。」

戦いの最中に迷うな」

「……はい」

騎士団総長であるハynesの指摘に、シェリーティアは頭を下げ返事をする。

「実戦ではささいなミスも命取りになることは今以上に肝に命じておけ。」

——では、次の組！」

シェリーティアははじめた剣を拾うと、次の手合わせの組の邪魔にならないよう後方へ素早く下がる。

（…………『白月姫』の専属護り手なのに、こんな調子じゃ護り手を降ろすとか言われかねない……）

小さく息をつきながら、腰にある鞘に剣をおさめる。すると、その腕を不意に誰かに掴まれた。

「——レイス」

見上げれば、傍にいたのは自分と同じく『白月姫』の専属護り手にして幼なじみの青年である。

彼の姿に、自然とシェリーティアの表情が綻んだ。

——が。

「シェリーティア。——ちょっと」

「……って、え、なに？」

いつもの優しい笑顔はそこになく、やや厳しい表情とともにひそやかな声で耳打ちされたあと、

シェリーティアはレイスに腕を軽く引かれた。

「一緒に来て」

「え……でも、まだ朝練習中……！」

「いいから」

そのまま腕を引かれるままに二、三步足を踏み出したものの、シェリーティアは総長である

ハインスのいる場所に視線だけ投げる。

「レイス、お願いだからちよつと待って。総長にことわりなくいなくなったら怒られるってば！」

「そんなに気にしなくても大丈夫だと思うけど。……じゃあ、一応ことわっておこうか？」

——総長！」

レイスは大きな声で、ハインスにそう声をかけた。

呼ばれたハインスは、今見ていた手合わせの組の手を一旦止めさせる。

声の主からなんとなく予想がついているのか、ハインスの眉がひそめられているように

見えるのは気のせいではない。

「……何だ？」

「今からシェリーティアと朝練習を抜けますから」

普段『癒しの騎士』と評されているレイスは、父親でもあるハインスにもその優しい笑顔を

惜しみ無く振り撒く。

ただし、笑顔でさらにと告げた内容に問題があったが。

「笑顔だからといって馬鹿なことを抜かすな！」

理由は!？」

「言わないとだめですか？」

「当然だろう、馬鹿者！」

「しょうがないですね」

軽く息をつく、レイスは隣にいるシェリーティアに視線を向ける。

「シェリーティア、ちよつとごめんね」

「え？」

レイスがそう言うなり、シェリーティアの足が地面から離れた。

「きゃっ、ちよつとレイス！いきなり、何!？」

突然レイスに抱き上げられてしまい、シェリーティアは慌ててしまふ。

「シェリーティアが足を傷めているので、医務室に連れていきます」
レイスの言葉に、シェリーティアはびくつ、と身体をこわばらせた。

(…………… やっぱり、気づかれてたよう……………)

シェリーティアは小さく俯く。

「そういうわけですから。異はないですよね？」

「それならそうと最初からそう言え。まったく、紛らわしい言い方をするな」

ハynesはレイスに抱き上げられたままのシェリーティアへと視線を向ける。

「シェリーティアもそういうことは黙っておかない」

「すみません……………」

「わかったなら、きちんと診てもらえ。——痛むか？」

「いえ、大丈夫です」

「そうか。見たところ大事にはいたらなさうだが、『白月姫』の護衛のこともある。

念の為、具合の報告をしに来い」

「了解しました。あとで執務室にお伺いしますよ」

ハイネスからの承諾を得られたレイスは、軽く礼をすると、シェリーティアを連れて

医務室へと向かおうとする。

「総長、すみません……………」

お先に失礼します」

シェリーティアも申し訳なさそうにハイネスに礼をすると、その場にいる心配げな表情の

同僚達にも大丈夫だからと軽く手を振る。

「大事をとって診てもらっただけだから、大丈夫。

——むしろ、大したことないからって言わなかったことの方が問題だから」

ね、シェリーティア？と言外にレイスにたたみかけられ、シェリーティアとしては何も言い返せない。

心配をかけてしまうからと思い黙っていたのだが、言うまでもなく見抜かれていた時点で

それは意味をなさないものになってしまっていた。

医務室に向かう為、練習場を離れていく二人の後ろ姿に、同僚達からは本音が洩れる。

「……………あー、あれは軽く怒ってるな」

「……………怒ってるよねえ。黙ってたことに」

「……………レイスであれだと、ナギはどうなるんだか」

シェリーティアのもう一人の幼なじみの名前が出た瞬間、『蒼月』の同僚達のあいだには

なんともいえない雰囲気が漂う。

——シエリーティアには、レース以外にもう一人、仲の良い幼なじみの存在がある。

『蒼月』の騎士達を閉口させられる『彼』こそが、シエリーティアにとって次の問題になることは明らかだった。

同僚達がそんなことを囁きあっているとは露知らず、練習場をあとにしたシエリーティアと

レイスは中庭から王宮へと続く渡り回廊へたどり着いていた。

「ね、レイス。降りしてもらってもいい？」

まだ騎士団の朝練習も終わりそうにないほどの早い時間である。

一旦練習場を離れてしまえば、王宮内でもこの時分では起きている人も少ない。

特に誰に見られているわけでもなかったが、レースに抱き上げられているこの状況はなんとなく恥ずかしい。

「だめ」

「でも、歩けるし大丈夫だよ」

「それでもだめ」

全然自分を降ろしてくれそうにない様子のレースに、シエリーティアはしかたなく違うことを尋ねた。

「……いつ、足のことがついたの？」

「——さっきの手合わせ、最後の踏み込みが甘かった時に」

……ああ、やっぱり。

シエリーティアは先程の自分の手合わせを思い出す。

急に足に力が入らなくなかったから、いつもと同じには踏み込めなかった。

心配をかけたくないから本当は言わないまま、自分一人であとから医務室に行くつもりだったのに、気づかれていては元も子もない。

「そう……って、レイス？」

医務室はこっちでしょう？」

渡り回廊が終わり王宮の中へ入るかと思ったレイスの足は、また外へと向かっていた。

シェリーティアが指差した方向とは逆である。

「わかってる。でも、行かないから」

——嫌な予感。

レイスの返事に、シェリーティアが上目遣いにレイスを見上げると、レイスの笑みが深まった。

「それって、もしかして……」

「当然。さっきは皆の前だからああ言ったけど、足を傷めたのはくじいたからじゃないよね？」

父上もそれは多分わかっているし」

「……………」

レイスの言葉に、シェリーティアの頭の中に色々な思いがよぎる。その中でも、これから真っ先にぶつかる出来事に思いあたり、シェリーティアは思わず慌てて

レイスの腕の中から逃げようとする。

「……………あ、やっぱりわたし降りるっ！」

レイスの胸の辺りをおしたり手や足を動かしたりと試みるが、シェリーティアの力ではレイスの身体はびくりともしない。

「シェリーティア、いいからおとなしくしてて。

あんまり動くと、いくら僕でも落としちゃうよ？」

ね？と今まで以上にさらに綺麗笑顔をのせたレイスに問われ、そ

の裏に有無を言わせないものを

みたシェリーティアはそれ以上の抵抗を諦める。

「僕だけだとどうしてもシェリーティアに甘くなるから」

「それはそうかもしれないけど……」

もう……どうしよう」

シェリーティアは泣きそうに小さい声で呟く。

自分が招いたこととはいえ、今から行く先で何が起こるか想像すると、シェリーティアの気分は下降きみだ。

「——素直に言わなかった罰だよ。」

残念ながら、今日はシェリーティアに味方出来ないから」

そう言うレイスは相変わらず笑顔のままだがその目は微かに笑っていないし、そこまで言われて

しまつては、シェリーティアとしてはしかたがない。

「……わかったわよ。このままおとなしく行くから」

シェリーティアは諦めたように溜息をつく。

——結局、いつものことだといえば、いつものことだし。

「……でも、ものすごく怒られたら、助けてね？」

「まあ……ものすごく怒られたら、ね」

——多分、そうなるだろうけど。

レイスがそう思ったことは、口に出さなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9287q/>

白月の祈り姫

2011年2月26日13時01分発行